

**部下サキュバスが横暴ふたなり女王を
早漏化させて下剋上！～ペニバンでメス
堕ちさせた裏切り淫魔の自業自得な末路～**



重厚な天蓋の隙間から、紫煙に燻された薄暗い天井がぐらぐらと揺れている。

視界が定まらないのは、私の両太ももを乱暴に持ち上げて、下腹をこれでもかと打ちつけてくるアネット様のピストンが一切の容赦なく続いているせいだった。

「あ……っ、ひぐッ、んああッ！ あ、ねつと、様……ッ、ま、まっ……っ！」

「待つわけないでしょう……っ！ ほら、もつと腰を割りなさい、ミア……ッ！ 私のモノを、根元まで咥え込むのよ……ッ！」

肉と肉がぶつかり合う、湿りきった水音が部屋中に響き渡る。

私の意思など完全に無視して、アネット様の寧猛な肉棒が最奥の子宮口をゴリゴリと執拗に挟り抜いていく。

杭打ちのように重く、逃げ場のない衝撃。

下位サキュバスである私の身体は、上位サキュバスである彼女の圧倒的なフェロモンと雄器の蹂躪に逆らう術を持たない。ただ快楽の神経を暴力的な

踏み荒らされ、勝手に熱い蜜を嘔きこぼしながら、狂ったように痙攣を繰り返していた。

艶やかな黒革のコルセットドレスから零れ落ちそうな豊かな双丘を揺らし、女としての完璧な曲線美を誇るアネット様。だが、その滑らかな下腹部から生え出ているのは、筋張って脈打つ禍々しい雄の剛直だ。

両性の性を兼ね備えたふたなり魔族。

本来なら産み落とし育むはずの雌の肉体でありながら、他者を容赦なく犯し、種を注ぎ込むための獰猛な凶器を併せ持つ特異な支配者。

彼女は自身のその二重の性に絶対の優越感を抱き、力任せに私の秘部を蹂躪しては、支配欲を満たしていた。

「ひいッ、あ、ああッ！ もう、無理……っ、いつ、ちゃ……っ！」

「いい声よ、ミア……っ！ 生意気な口を利く隙もないくらい啼いて、私の種を受け止めなさい……ッ！」

ずぶりと凶悪な太さが奥底を突き破るような感覚とともに、私の頭の芯が真っ白に弾け飛ぶ。

本日何度目かも数えられない絶頂が、背筋を焼き尽くすように駆け上がった。

つま先がピーンと伸び、視界が涙で滲む。アネット様の手指が私の腰骨に食い込み、逃げようとする身体を強引に引き戻しては、無慈悲なピストンを

再開する。

休む暇など一秒も与えられない。

「やあッ、あ、はあッ！　すぐ、突かない……っ、ひううッ……」

「ふふ、締めつけが強くなってきたわ……っ！　お前の身体、こんなに私を欲しがって蠢いているじゃない……ッ！」

「ち、が……ッ、勝手に、いかされてる、だけ……でっ！　あ、んぐッ、ふああッ……」

泣き叫ぶような喘ぎ声を上げながら、私の心の片隅はすっかりと冷めきっていた。いや、それ以上にドス黒い苛立ちが渦巻いていた。

——あ……もうやだ。かったるい。心底、うんざりする。

頭では死ぬほど冷めているのに、身体は上位種の雄器に屈服させられ、無様にイカされ続けているこの屈辱。

快楽を搾取され、潮を吹かされ、玩具のように消費される。

サキュバスとしての本能が歓喜の声を上げるほど、私の自尊心はすり減っていく。気持ちいいからこそ、悔しくて、憎たらしくて、反吐が出そうだっ

た。

「は、あ……ッ！ミア、中に……全部、出し尽くさせなさい……ッ！」
「ひぐつ、あ、ああああッ——！！！」

容赦のない最奥への連撃に、私の喉から情けない絶叫が絞り出されると同時に、アネット様もまた激しく腰を密着させ、喉を反らせて甘い嬌声を迸らせた。

私の最深部で、ドクドクと脈打つ熱い塊が何度も激しく解き放たれる。

アネット様の爪が私の肩に突き刺さり、荒い吐息が首筋を濡らした。

「はあ……っ、はあ……っ、く……ん……っ」

事切れたように倒れ込んできたアネット様の重みを感じながら、私はシーツの上で小さく痙攣を続けていた。

内壁は無理やり押し広げられた熱と痛みに鈍く疼き、太ももの内側を白濁と愛液がだらしなく伝い落ちていく。

やがて息を整えたアネット様は、私の奥から自身をぬちゃりと引き抜き、乱れた黒革のドレスの胸元を直しながら立ち上がった。

陶器のような白い頬を朱に染め、見下ろす深紅の瞳には傲慢な優越感が満ちている。

「ふん……今日も無様に啼いたわね、ミア。お前など、私の前ではただの牝穴よ」

満足げに鼻を鳴らし、アネット様は部屋から出て行った。
ボタンと重い扉が閉まる。

「……っ、は……あ……っ」

残された私は、力が入らない手足のまま、シーツの上に大の字で転がっていた。

身体の奥がじんじんと熱い。頭はクラクラとして、絶頂の余韻で指先が震えている。

無様にイカされまくった肉体の気だるさに、心底うんざりしたため息を吐き出した。

「……何が、ただの牝穴よ。調子に乗って……」

身体が勝手に快楽を受け入れてしまうことへの自己嫌悪と、それを支配と勘違いしている傲慢な女王への殺意にも似た復讐心。

絶対に許さない。

このまま都合のいい肉便器として消費され続けるくらいなら、どんな禁忌に手を染めてでもあの女を玉座から引きずり降ろしてやる。

だが、純粹な魔力や力押しでは、下位種の私が上位種であるアネット様に敵うはずもない。真正面から挑んだところで、またこうして組み敷かれて笑いにされるのがオチだ。

魔族の常識で勝てないのなら——人間の悪知恵と狡猾な技術を利用してやるまで。

プライドの高いサキュバスなら絶対に手を出さない「人間との結託」すら、今の私には格好の武器に思えた。

脳裏に浮かぶのは、地下牢に捕らえられているあの人間。

あの時、私が犯されている様子を冷静に見つめ、冷笑を浮かべていた薬師の男、コルン。

『今の状況に満足されていますか……？　もし変えたければご相談を』

あいつがそう呟いたのを私は聞き逃していなかった。

「……待ってなさいよ、アネット」

私は震える手でシーツを強く握りしめた。

あの傲慢な雄器を無力化し、今度はあいつの後ろの穴を貫いて、私以上の無様なアへ顔で啼かせてやる。

冷たい決意を胸に、私は重たい身体を引きずりながら、復讐の企みを巡らせ始めた。

第一章 一滴の劇薬と、捕食者の情けない早漏絶頂

古城の地下深く。

冷涼な石壁が連なる牢獄の通路は、湿った苔とわずかな鉄錆の匂いに満ちていた。

地上階でアネット様に散々犯し尽くされ、軋む腰と鈍い熱痛を抱えたまま歩く私にとって、この薄暗く冷え切った空気だけが唯一の気休めだった。

「……はあ。だる……」

無造作に伸ばした銀灰色の髪をかき上げ、私は石壁に手について小さく息を吐き出す。

内腿の奥底には、まだアネット様に無理やり刻み込まれた余韻が残っている。一步踏み出すたびに、肉の内側で押し広げられた粘膜が微かに擦れ合い、身体の内奥が不愉快な熱を帯びる。

頭では殺意に近い侮蔑を抱いているというのに、サキュバスの愚かしい肉体は、与えられた暴虐な快楽を忠実に記憶してしまっているのだ。

鉄格子の隙間から漏れ出る、薄暗い魔導灯の淡い燐光。

その最奥、人間たちの捕虜が収容されている区画の前で足を止める。

「お疲れ様です、ミアさん……今日もずいぶん、酷い扱いを受けてきたみたいですね」

鉄格子の向こう側から、柔らかく、けれどこちらの皮膚の薄皮一枚を撫でるような声音が響いた。

亜麻色の無造作な癖毛に、優しげに細められた垂れ目。くたびれた麻の作業着をまとった青年コルンは、捕虜の身でありながら、まるで自宅の書斎で客人を迎えるかのように寛いだ姿勢で腰掛けていた。

「……観察が趣味か？ 人間のくせに、いい度胸ね」

私は鉄格子に背を預け、冷たい目を彼に向けた。

アネット様が私を組み敷く謁見の間や私室には、見せしめとばかりに人間の捕虜たちが転がされていることが多い。この男もその中の一人だった。だらしなく喘ぐ私を見て、他の人間たちが恐怖と淫魔の毒気に当てられて正気を失っていく中、コルンだけは終始、淡々とその光景を観察していたのだ。捕虜として捕まった人間のくせに、怯える素振りも絶望に打ちひしがれる様子も一切見せない。周囲の囚人たちが生きる氣力を失い、ただの抜け殻になっていく薄暗い牢獄の中で、この男だけはなぜか、巡回に来る私にこうして平然と言葉を投げかけてくる。

最初はただの気まぐれだった。毎晩のように上位種の理不尽な快樂に晒され、うんざりしていた私の退屈しのぎ。けれど、淡々とこちらの皮肉を受け

流す彼の奇妙な落ち着きに付き合っているうちに、看守と捕虜という境界線はいつの間にか曖昧になり、妙な距離感が出来上がってしまった。

「観察するつもりはなかったんですがね。ただ、あなたがあまりにも痛ましそうに、それでいて完璧に『絶頂させられた後の顔』をしているものだから……サキュバスというのは、上位種の雄器に貫かれると、意志とは無関係に雌の悦びを刷り込まれてしまう生き物なんですかね？ 非常に興味深い」

「……殺すわよ、薬師」

「おや、手厳しい。でも、本当は心底うんざりしているんでしょう？ あの傲慢な欲望のゴミ箱にされる毎日に」

私は周囲の気配を伺いながら、鉄格子に顔を寄せ、ごくわずかな小声で囁いた。

「……ねえ。前に言ってたわよね。『現状を変えたければ相談に乗る』って……あれ、どういう意味なわけ？」

私の問いかけを聞いた瞬間、コルンはふふつと喉を鳴らして小さく笑った。細められた垂れ目の奥に、観察者特有の冷徹な光が宿る。

コルンは立ち上がり、静かな足取りで鉄格子の際まで歩み寄ってきた。彼の手から微かに漂う、乾燥ハーブの苦く清涼な香り。それが、アネット様の暴力的な甘ったるいフェロモンで濁っていた私の鼻腔を、すつと解きほぐす。

「単刀直入に取引をしましょう。僕をここから逃がす手引きをしてくれるなら……あの高慢な女王様を、完膚なきまでに『わからせる』ための劇薬を差し上げますよ」

「……薬？」

「ええ。淫魔の力の源であり、他者を支配するための武器『外へ放つフェロモン』を完全に遮断し、すべて自身の体内に逆流・蓄積させる薬です」

コルンは革のエプロンのポケットから小さなガラス小瓶を取り出した。中には、淡い紫色の液体が妖しく揺らめいている。

「本来、サキユバスは快楽を周囲に撒き散らし、他者から精を吸い上げることで自制を保っていますよね？　しかし、その出口を塞がれ、毒気がすべて自分の肉体に溜め込まれたらどうなるか……想像がつかますか？」

「……感度が、暴走する」

「ご名答。外を犯すための凶悪な雄器も、奥底に眠る雌の急所も、触れられただけで狂い悶えるほどの超敏感な性感帯へと作り変えられる。支配者気取りの女王様が、ほんの少し指先で転がされただけで、無様に潮を噴いて啼くただの牝犬に成り果てるわけです」

コルンは優男らしい人当たりの良い笑みを浮かべながら、実におぞましく、そして甘美な未来を淡々と語った。

理知的で、冷徹な悪意。

「……面白いじゃない」

私の唇が、自然と冷たい三日月を描いた。

私は格子越しにその小瓶を受け取る。冷たいガラスの感触が、火照った指先に心地よかった。

「あいつの毎日の晩餐に、これを一滴ずつ混ぜればいいのね？」

「ええ。無味無臭です。最初は『少し身体が火照るな』程度ですが、三日も経てば……彼女は自分の身体に何が起きているのかすら理解できぬまま、快樂の泥沼に堕ちていきますよ」

コルンはそう請け合いながらも、ふと悪戯っぽく肩をすくめてみせた。

「ただ……あまりに勘が鋭い者は、魔力の巡りのわずかな違和感に気づくかもしれません。リスクはゼロではありませんが……」

「ふん」

私は鼻で短く笑い飛ばした。

「あの腰を振って他者を征服するしか脳がないアネット様が、そんな優秀な察知能力を備えているとは思えないわね」

「おや……ずいぶんと不満を溜め込んでいますね」

面白そうに目を細めるコルンに、私は心底うんざりした視線を投げ返す。

「あいつの肉棒で、毎晩のように子宮をぐりぐり抉られてみなさいよ。少しでも知性があれば、あんな力任せに押し潰すような野蛮な真似、恥ずかしく

てできないはずでしょ」
「なるほど、それは実に説得力がある」
コルンは納得したように喉を鳴らし、優しげな笑みを深めた。
「いいわ。乗った。あいつのプライドがどんな顔で崩れ落ちるか、見届けるわ」

それから数日。

計画は、恐ろしいほど順調に、そして静かに進行していた。

アネット様のための豪華な晩餐。

極上の魔獣の肉と熟成された葡萄酒。そのグラスの縁へ、私は毎夜、コルンから受け取った紫の雫を落とし続けた。

アネット様は何の疑いもなくそれを飲み干し、相変わず尊大な態度で城を支配していた。

肉を切り分け、ワインを喉へ流し込みながら、アネット様は玉座のような椅子の上で不敵に口元を歪める。

「ふふ、ミア。お前にも食事を分けてあげるわ……ほら、テーブルの下に入って、私のこれをしゃぶりなさい」

黒革のドレスの裾を自ら跳ね上げ、彼女はすでに太く脈打つ雄器を無造作に露出させた。

食事をしながら部下に下腹部を奉仕させる。それが、ここ最近の彼女のお気に入りだった。

「……ありがとうございます、アネット様」

私は感情のこもらない声で心にもない返礼を口にし、ため息交じりにテーブルの下へと潜り込んだ。

上の口で美食を味わいながら、下の口からは己の欲望を垂れ流して他者に処理させる。一体どこまで下品で野蛮な生き物なのだろう。同じサキュバスという種族であることが、心底恥ずかしくなってくる。

私は膝をつき、目の前に突きつけられた凶悪な剛直へと顔を寄せた。立ち上る熱気と特有の匂いに顔をしかめつつ、尖らせた唇で先端を包み込む。

じゆる、じゅぷ、と唾液を絡ませながら舌を這わせ、硬く張り詰めた太身を喉の手前まで咥え込んでいく。

テーブルの上からは、フォークとナイフが皿を擦る金属音と、時折漏れるアネット様の満足げな吐息が聞こえていた。

「ん……っ、そうよ、もつと喉奥まで使いなさい……っ」

カチャリとナイフを置く音が響いた瞬間、アネット様は私の頭を力任せに引き寄せ、一気に喉の最深部までその太い肉塊を突き立ててきた。

食事の終わりを告げる合図だ。

「んぐッ……！？ お、え……ッ！」

気道が塞がれる圧迫感と、強制的な嘔吐反射。

私の苦悶など意に介さず、アネット様は腰をぐつと突き出し、私の喉奥を直接犯すようにして濃密な熱い塊をドクドクと解き放った。

「はあっ……く、ん……っ！ 全部飲み干しなさい、ミア……っ！」

喉を焼き尽くすような白濁の奔流。

引き抜かれた途端、私は激しくむせ返り、床に両手をついて咳き込んだ。飲み込みきれなかった精液が口元からだらしなく垂れ落ち、鼻腔を逆流してツンとした刺激とともに床を汚していく。涙で滲む視界の中、アネット様はテーブルの上から私の無様な姿を見下ろし、心底愉快そうに喉を鳴らして笑っていた。

それが、アネット様の毎夜の悪趣味な食事風景。

（……笑ってられるのも、今のうちよ）

私は口元を手の甲で乱暴に拭いながら、暗がりの中で冷酷な笑みを噛み殺した。

あのワインに含まれていた劇薬が、確実に彼女の身体の奥深くまで浸透している。傲慢な捕食者としての宴は、もう間もなく終わりを告げるのだ。

そう、変化が訪れたのは、薬を盛り始めて二日目の晩餐だった。

いつものようにテーブルの下に潜り込み、突き出された剛直を咥え込んで舌先を這わせていた。だが、口内に伝わる反応が普段と明らかに違っていたのだ。

舌の腹で先端の鈴口を軽く転がしただけで、アネット様の雄器がびくんびくんと過敏に跳ね上がる。

さらには、テーブルの上からフォークとナイフの動きが不自然に止まり、肉を咀嚼している最中のはずのアネット様の喉から、「ひう……っ」「ん、あ……っ」と、漏れ出るような甘い吐息が洩れていた。

（なるほど……これが、薬が効いている証拠か……）

フェロモンの出口を塞がれ、体内に熱がこもり始めたことで、他者を犯すための器官が早くも過剰な性感帯へと変異を起こしているのだ。

「……んぐ、じゆる……アネット様あ？　どうか、されましたか……？」

私は肉棒の太身を舌で転がし、あえてわざとらしく上目遣いで尋ねてみた。
「な、なんでも……っ、ないわよ……ッ！」

返ってきたのは、普段の尊大さとはかけ離れた、どこか切迫した上擦り声だった。

膝を小刻みに震わせ、テーブルクロスを強く握りしめているのが下からでもよく分かる。

「も、もういいわ……っ！ 今日のご飯は、もう終わりにするわよ……ッ！」
そう叫ぶや否や、アネット様は耐えきれなくなつたように私の頭を乱暴に鷲掴み、喉奥へ一気にその太い肉塊を押し込んできた。

まだ食事を始めてから十分も経っていないというのに。

「んぐうッ……！！？ お、えッ……！！」

再び勢いよく解き放たれる白濁の奔流が、私の喉を容赦なく押し潰す。
ドクドクと脈打つ勢いも、普段より激しく、荒々しい。

射精が終わると同時に、アネット様は逃げるように肉棒を引き抜いた。その顔は普段の冷酷な笑みなど跡形もなく、何か恐ろしいものに追われているかのように激しく紅潮し、焦燥に歪んでいた。

ボタン、と足早に部屋を出ていく音。

「……っ、げほっ……ごほッ……！！」

私は床に両手をつき、喉に残った生臭い精液をだらしなく吐き出した。

涙で滲む目をぬぐい、ふと立ち上がってテーブルの上を見やる。

そこには――

皿の上で、まだ半分以上も残されたままの魔獣のステーキと、口をつけられたばかりの葡萄酒のグラス。

「……ふふ。全部食べ終わるまで……射精が我慢できなかったのね」

私は床の汚れを足で踏みにじりながら、暗がりの中でにやりと口元を歪めた。

あの傲慢で高飛車なアネット様が、食事の途中で欲望に耐えきれず、慌てて部下の口で果てて逃げ出すだなんて。

その余裕のない無様な姿を拝めただけで、喉の奥に残る苦しさと生臭さなど、完全に吹き飛んでしまうほどに痛快だった。

そして迎えた、捕虜の尋問と「間引き」の日。

大理石の柱が立ち並ぶ広大な謁見の間。